

# 児童発達支援施設にて、療育を観察、体験し、障害のある子どもと関わる中で「インクルーシブ保育」を探求する

工藤ゼミ

児童発達支援施設で毎月2回、「子どもを知る」「障害を知る」ことを活動の目的として、保育実践の観察や実際に子どもと関わることを中心に活動を行った。

## 活動内容（抜粋）

5月25日

学生も子どもと一緒に朝の挨拶、体操、読み聞かせの活動を行う。その後で、新聞遊びを一緒にする。初めは様子を伺っていた子どもたちも学生と一緒に遊ぶようになる。人と関わりをもたない子、急に情緒が不安定になる子、友達のものを取ってしまう子など、難しい対応の子どもを観察したり、子どもとかかわったりした。

10月26日

今日特に印象に残ったのは、RちゃんとTくんの2人の関わりである。Tくんは話さないが頷いたり指差しなどで気持ちを伝えることが多い。RちゃんがTくんの服の裾を掴んで引っ張っていたので、保育者がやめさせようとした。ところが、TくんはRちゃんの腕と自分の服の裾を掴んで、Rちゃんに服の裾を掴むよう指示していた。Tくんはどうやらやめて欲しいのではなく、Rちゃんに掴んで欲しかったのではないかと思った。（学生の感想より）

## 児童発達支援施設での経験から「インクルーシブ保育を考える」

12月22日 活動の振り返り

ゼミの時間に、今年度の活動の総括と来年度の計画を話し合った。その中で、ある学生が「子どもの発達に合わせて5歳児であっても少し簡単な活動内容を考えた方がいいのではないか」と発言した。その発言に対して、別の学生が「その子どもはできないことがあるかもしれないけれど、言われたことはわかる。だから5歳児として活動を考えた方がいい」と発言した。子どもは例え自分の気持ちを話せなかったとしても、心では様々なことを感じている。だからこそ、子どもの立場に立って理解することが必要である。学生は、児童発達支援施設での活動で「障害とは何か」「障害のある子どもを理解する」とはどういう意味かということを経験を通して学ぶことができたようである。そしてインクルーシブ保育についても、学生同士で、障害を持つ人を中心にかかわりの輪を広げる保育が必要であるということや、障害の有無にかかわらずインクルーシブな保育を通して、子どもの可能性を知ることができるといった意見が交わされ、インクルーシブ保育の可能性を感じていたようだった。

